

錦

の

魚

上

百廿五番せんえん  
にしきの魚  
二冊

へ 13

2900

1



13  
2900  
1-9

門へ 13  
號 2900  
巻 1

自叙

李太白詩百篇抄

除く 油と合費し 唯一編

の趣向 得ず 賢田 知す 不学

かろ 不楽すの三年 磨り 拙き 向

かろ 如し 去年 友人 一冊 授け

をば 工蘭 唐山人の 戯作

昭和九年  
七月五日  
購求

9-7-5

底の金翹傳の書は、  
人智の物として、  
事あるは、  
中の人を、  
今様を、  
一書、  
後、

巻三上巻一

かゝる書は、  
習俗、  
金草、  
花、  
再、  
二海、



天保庚子新樹子  
 文衣の口  
 金水松上小古を補  
 天保庚子新樹子  
 文衣の口  
 金水松上小古を補

末乃美を比 鏡の海  
 貴女は 御遠方へ  
 寄る身も 志すは 吹簫の  
 音も 聞かぬ  
 泣れ ぬ

天保庚子新樹子  
 文衣の口  
 金水松上小古を補

天保三上巻三





まんぢ  
あつちのこぢ  
そのま  
かろふ  
うらふ  
うらふがま  
あつち  
まんぢ  
あつちのこぢ  
そのま  
かろふ  
うらふ  
うらふがま

きんぎょ



風形  
花情

錦の魚初編卷之上

東都

松亭金水編次

第一回

通俗金翹傳の序辞よのちく云玉磨がまはバその  
 堅きを志すもど。擅焚がれがその馨したを知らむ。妙を  
 今の世よ才も貌もそろひる。處女の時よあはれ  
 ぬむ千方の折磨をうろのの。まご名で千歳はのち  
 傳へて朽ざるべしと宜あるる家貧ふしと考子出

国家乱まて忠臣彰る。老子が格言抄人のつれづれ  
 よく生涯栄華と持て縛るく終るをとり方め  
 未世よ名とあまえん。あまらるるを此冊子ハかの金  
 翹等が故事よ基つた世界の却る新奇とむねこし。  
 謙倉かうの言葉とめく。貴女見まふふ年々うら  
 ちむ。そもくあふ東路よ。その名もうた浅きもの観  
 世音人もあど遠くを間口五間の土庫舗什麼此  
 家へあつくりより。呉服めめと誌国へ鬻きまふく

昌きうりーが。主金兵衛五十とろえ。今一個ある  
 令息あり。名と金次郎とよぶあり。今年九ふ  
 あり。その生質温和ふして。商人の子ふま  
 似む。いと風流あることを好む。おくある庭まきま  
 する。書斎とあつくりひ此処まかりて。終日哥と持  
 作とあどして。雅かうにうらうら。その日へ雨の  
 そがかりて。いと淋しく軒端りる。雷と玉と  
 見るまてよ。場居とつらあがめたる。所へとせたる

記原





下拙げせうなるほどきあち氣持きもちがコらるこらのて金かねへをや何ありと  
 おのおのどこ次つぎ身み八百やちひ甚こでも津波つなでもたた實じつに  
 の鱧うなぎでも筋すぢよりちちやや雷かみ文字あざな々ののおおありと  
 の野のへへでもも文ふみ字じででんんぶぶ世せののふふおおありと  
 づづここ口くちををありありびびささりりいいけけややせんせんせせ金かねそのそのやや倫りん  
ん言げん汗あせののどどーーササままろろくく委い細さいととききてて入いままトトいいふ  
 ううちち豫よてていいひひつつけけおお死しししみみやや姫ひめのの女むすめともともひひあ  
 づづええ殺ころ三さんいろいろををありありとと深あか付ひのの大おほ新あらた渡わた

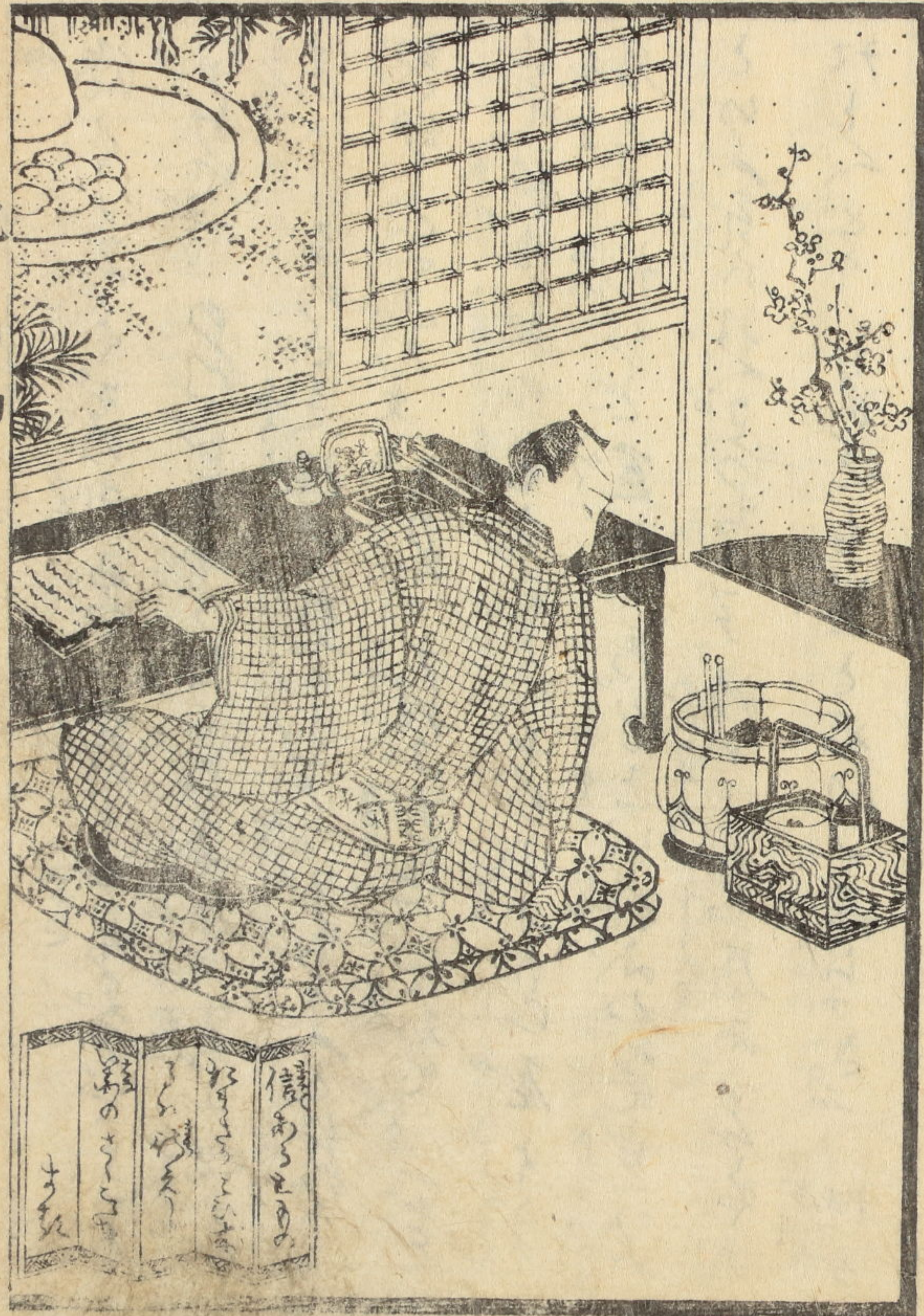
の猪ちゆう口くちととううののせせてて船ふね子こををつつけけくく持もてて来きるる金かねへ  
 ろろんんぞぞううめめののがが何なにののササ文ぶんさんさん多たひひら  
 おおおおんんるるせせんんままろろおお桐きりととトトいいひひああづづうう姫ひめ子こ殺ころを  
 ささせせくく下したはは何なにのの文ぶん峨がままはは文ぶんののぐぐ色いろ頂あたま戴をかぶの  
 上うへののヨヨツツトトととありありおおままららくくココウウおおあありりももちちららととあありり  
 ココををわわくくららちちににででんんぶぶ美うつくししくくああららううののそそううくく  
 めめづづききりり女むすめ造つくつつここアア太おほろろ若わか見み形かたち小こ山やま沈しずむむとと  
 ららうう女むすめモモククおおままええんんのの香かづづままいいんんででももくくそそんんな

りむさうく文へあえまりのやでもらるめいりぞや  
 そまおれぬ物とていりろけが。モウ心ぐらりの  
 女へぞんドません文へヨまろの愛おづーごの  
 一ツ飲ねく女へおろぐふモウ私ハハ酒ハ文へいやく。  
 ぶふもつまうねく。ごまろく。そんあうこらちが重  
 やせう金コレ何ぞ外よさうあわねうをてまの  
 女ハイとさあゆく金へとたよ女さんいもくまあろの  
 身上がままでこね文へ今せううねくおあへさん今

の形造とあわまびのどやア金へなろふあんな  
 ののとぶふあるものう。たんまりお情けねく上  
 意にせ。多くむごとのをはずとめの一美を文へそ  
 こぞえくよとすやて笑てあうが。あ  
 女鬼ハあろの海もを松屋何某とろといふ。小  
 同物屋の女鬼とていひて。ろとた連の女鬼  
 ハ姉とてそろさ。勿論両程ともいひてといひと  
 ぶ。身上のろ中ぐらあごといひかまろ。是非

あまさまとやらおめとひん役ありた誰ぞ仲人と特なに  
いひいさまくい以覽とらう。そりやお親父もお煮母も  
うれ志らがらてせ兼知らやせう。あんのぞうさま由  
ねつこけささ令ハツルそうろろ久し海まと何もともまき  
ふもあーをお媒あ姁ととのんで言ひれるのを  
おのぐえ易イこけづら其そ他にも少くおめの目に  
りのぐそて笑ひるさんをヨ女ト正笑やアーね  
ろろおめの目とお刺しあせ入らとういふこけ子

合「オトおうるな物ごとけしと急かく世間のま事  
ゆといふ女らが。親と親とのおんで母らふめら  
けこと梅のつき女けとあいを令ハソ中やアあらむと  
あんの教えのとりりとううつが女の方トやア  
堂ちうらぐらわらいとおめの目も。う得親の  
おめの目男ハ音ともいひ得し。何らいにてんくて  
きふ由海ずるがら。嫁入して来る。淫子なり  
小一晩た森エ。二晩森エしとくツイ支拂の情も



江戸  
御  
禮

源くありく。その内也ア思とむ由よ此こゝ来きる。あんどつり  
 こけだ。まのここいいままああららななくくああららななららぬぬ。根ねぐぐ実みまま惚ぼ念ねん  
 念ねんううままののまま婦ふををねねららるる。ササッッままちちががよよとと。仔細しじゆ  
 ちちどどいいままどどアア文ぶん「その也アあ太た死しふふ左さ松まつササ。主しゆ知ち也や。合あ「そそ  
 ぐぐええ。何なにもも私わがのの宅たくがが。ささくくそのその小こ洞どうめめのの屋やより  
 身み上あがが何なにれれどど区くめめららるる。身み上あとと太た松まつふふわわつつてて貫くわんりり  
 ととりりいいままむむくくののちちへへるる。波なみ女め児ごをを女め房ぼうみみすするる也やア  
 ねねととくくぞぞううななののとともも区くとと心こゝろののてて居いららささ。チチトト押おしぐ

つ多たくく中ちゆうううぞぞがが。女めののわわううふふもも。かかののああええささかかととり  
 めめつつととくくささととくく夫む婦ふよよありありり也やア。何なにれれががてて入いるる。左さも  
 めめくくそそああすすとと入いららぶぶけけがが合あ持もちごごうう始し終しゆうののここああららはは  
 あるあるのの好このむむ着ぎ物ものもも着きららままるるのの。主しゆととままるるうう  
 るるんんぞぞとといいままをを亭てい主しゆよよあるある雄お子こののよよううちちののままええ  
 扱あけけ身み上あよよほほままととくくああららるる也やア。何なにれれががああくくねねくくそそら  
 いいふふとと一いつ旦たんままりりよよでもでもああららてて心こゝろののままををままののかりかり念ねんら  
 ねねくく下げ也や。姊あねくくふふももさされれねねくく中ちゆうううままりりななここははけけはは笑わらへへぬぬがが。

多くそくそくでもねぐ。そまふやアまふこころちも。そま  
 方やうがつりのかまを肉せ入れマるやあませ入るど。イヤ照く  
 のい深ん切き厚あく謝一たてまつるこけきトキニろちを  
 照くでも勢一くね入何どぞ今うろ出けやせう。  
 雨あも少一小修よあつこトそまより二人つまて  
 青せ樓ろうへやおもむれん。酒い樓ろうへやいろろえころ浅あ草  
 高た本まの岸よ松屋ま浅あ佐さ平へいといふのあり。小こ間まの  
 と商ひと所あ々くの屋敷しき入とまし。元もとより律義

一い片ぺある。うまままよらりけれバ朝あ鮮せんといて馬丸ま  
 といひ馬丸まといつとく甲と欺く悪さとげせば高  
 利こと把むと信あ実じよ活生せい成せい勉べんめよけは身み上ある。  
 さまままよらりざれどままと貪一もあらず  
 て女兒に兩り個ごといちになり。姉あの翠妹めいと六阿あ国  
 と号て兩個ごとも。その容止との麗うさと柝の腰の  
 志ああらる。天てん然ぜんの容色しきままままと且天津てんひ女子  
 何なんとさらび蓬ほう萊らい宮みや裡りの神仙せんあらんとおり

洞魚神

むかひの生まちぬまま父ちち母はは深あくここを愛あしてま花はな中なかのふかぎぎててせせらら女をののままのの教しええををここににああららふ  
正ましくくばばささるるありり琴こ三さん弦げんをももああららううのの明あくれれるる  
志しととああららううなりり誘よひひととくく天てんはは不ふ測そくのの陰いん雨うの  
とと人ひと間ま不ふ時じのの病びやう災さいありりとと翠すいののああるるどどよより  
鬱う々々早はやくく食くすすままだだ色いろ青あおざざらら何なにととああくくああららひ  
悪あくししととくく寐ねももややむむどど子こ舎やのの引ひ籠こをを座ざ  
ららああららむむ或あるははまま物ものをを一ひとげげはは法はふ然ぜんとと泣なくく居ゐるる

日ひももああららむむありり父ちち母ははととままととああくく按おじてて彼か処この  
ゆゆらら此こ処このの加か持ぢ道だう遥やうとと甘あまいい灸しうままええとと子こ  
ゆゆらら迷まいい兩りやう腕うでのの心こころ辣しやくううああららざざれれどど免とははりり病びやう  
よよううららむむととくく籠かごアアととぐぐちちららううちち子こ死し多たりり姉あねのの俱ともく  
姉あねがが身みをを按おじじてて居ゐるるとといいががそれそれとと野の察さつしし  
ららううととままへへちちぎぎ折おちちてて居ゐるる姉あねががそそををくくよよりりととひひらら  
糸いと一ひとおおひひささええ切きりりのの多たぶぶとと病びやう氣きううああららむむああららむむ  
時ときよよううとと哀あはれれししももああんんととももるるののはは涙なみだををああららむむ一ひと怨うらみ

記 録 二



わーそくに空そらむありあがりてお出いるさうぞ。ア、おんる  
 心のちで。何なに知しぐぞふあつのでござんす。お爺おやさん  
 もお母お母さんも、ちのせうにあらんぞ。おんるぞ。夜の目  
 もろくく。無む睡すい眠ねむど平へいせきさうくして吾われ儕せいと遠とほ  
 つく。物ものどうちを過するむど。いもぞ。そまゝ。此こゝ會あひ  
 名なもつけらまね。病び氣きぐ。おんる。いばいば。いませうぞ。  
 かうしてらうく。いさゝか。と。勞らう忘わすれと申まをす。あつりませう。  
 多たおとりののおきくえや。お社とさんぐ。まのふ。芝居あしなへ

おたるまらうぞ。大おほは楸くぐとえ。とよ。おんる。おんる。い  
 おんるも髪かみでもとりあひく。天てん氣きぐよく。聖せいたたり  
 芝居あしなへでもお出いるさ。病びひの氣きく。おんる。い  
 ちの息いきが。おんる。い。おんる。い。おんる。い。おんる。い。  
 居いる。い。おんる。い。おんる。い。おんる。い。おんる。い。  
 一いっ所しょよ。おんる。い。おんる。い。おんる。い。おんる。い。  
 姉あねの。おんる。い。おんる。い。おんる。い。おんる。い。  
 俯うつき。おんる。い。おんる。い。おんる。い。おんる。い。



「おんふぶふぞして。芝居人でもゆく氣ふあつ  
 うよらうに。甚移る正の井く。いぞで。お勤あつて  
 移り起り。浄水にゆくまゝ氣無性で。とたよ  
 よると吾身あづも。こまが病氣うあつあんが。  
 ぶふしてあえまよあつとやうと。愛想のはきると  
 があるヨ。けんふ吾儕がやうなもので。姉どとあづ  
 こそ毎日毎んやうを。お勤あつておまそ。  
 ばくも氣とむげまよとやうに。言てくえあつあづ人

の心。おりのごのとも。屏あいと。言葉で礼はいを  
 ぬが。実のと吾儕のま。ぶふで長くの生ら色  
 まの。此よまこととお爺さんやお母さんふやう。  
 此苦勞のうふ歎き残くけて。不孝なまよ。  
 う。ちんも早くよくあづ。お勤あつておまそ。  
 何れおませうと。言て入るもの。煎豆ふ花  
 けさくとも。此病氣のよくあるまのヨ。序でござう  
 いつくおまが。おまも吾儕が死んどる。跡へ残つて

沓魚初上

十一

お爺さんや。お母さんのは一生とお世活するのにお  
 まへなること。ぶみぞ身の上と大事ふして。お世話を  
 もせぬやうに。お母さんでお両個は。孝行として  
 おまへ。こころ始り女といふものへ。悔しのめでたえ  
 生まて。こころは居て。婿とどろても。天窓のつぐむ。  
 その良人の氣に。よるもの。ツイ両親も。麻糸よ  
 あり。そのきせまのとも。めりても。其処が女子のちろ  
 むの野。何れにも。良人のとある。十ヲふ一ツを

知事あぐ。親ふもそむくところある。まご一個  
 身の時とちがう。親のゆくみも深くあり。  
 親子の中が。こころあるも。世間はまき。あると  
 おまへの誠は。おろけで。氣づても。志免と一そ  
 めるさるう。そういふものもある。いけれど。  
 ぶみぞ一生おまへ親の。お氣のたまむ。かう  
 あして。こころは。こころを。かりが。吾儕の。お  
 ひと路の。ひきして。涙と。あき。妹が。良人。と。完

尔とへあえの多コトと志するが。あつたおこ  
 ち多く〜い何もうも如やあいのあまよこんる  
 馬心三知とあつて。マゴふ志かうのいお国さん  
 堪然〜しておるまよトりぐこあえコト〜いも  
 せむとま〜多姉さん〜〜のが。死ぬのあんの  
 と其振るをとおひでま。十日や女日たつ  
 ても。此〜あるりて死あまるののうねそれ  
 より吾儕がいのを〜と芝居人ゆ〜支度でも

むた〜〜〜〜〜警もあの日あつて。そら〜〜解〜  
 てわけやうと。〜から成か〜〜「志〜あ  
 主人の伝切ら。うと〜い。が。さ〜〜〜  
 おく〜。芝居〜うりうり。あ〜〜の〜  
 一〜〜〜〜〜款をけ〜〜のめらお〜  
 眉のあ〜〜〜〜〜をよせ。〜〜〜  
 今ま〜今〜〜〜。習〜〜〜と〜  
 心〜〜〜。内〜〜〜。あ〜〜〜。

河魚社

十四



心算

心算

かく病びやう氣き小こ隆りゆうらうり。恥ちらうくもひまさらう  
 何なに極ごくあるものろモウ。些ちちのくといひうき。今日けふ  
 まで居いましうが。現在げんざい親おやが血ちはけ。あま  
 うらうの姉あね妹いもうとをうらみもなう。おかくし  
 さらん却かへてかうらう。サそのやうみさなは  
 くよくやうする。病びやう氣きのうをうちあけておま  
 せまき。恥ちらうとかりひの極ごくらう。そらや  
 よくくでぶらうませうが。癖くせみまは猫ねこともだん

合あ。あんがたうのね吾われ儕せいでも。まこ相あひま譚だんの仕しやうも  
 あらう。陽やうさず言いくおやせト星ほしとさう星ほし一いっ妹いもうとが  
 正ただなるよ。おのびど完かん尔に一いっのうと一のひらう赫あつと扱あつむ  
 糸いと。真まおらめいさうとサ姉あねきん難なんふもひひを  
 志しるひらう。言いておやせト高たかより厚あつた治ち切きは  
 今いま入いれ翠すいもつむぎ。初はつまけは片かた袖そでは口くちを覆おほ  
 ひてニッニッ咳せきらう。それらうよ。言いてくえるは  
 切きと無むなる由よし氣きの毒どくらうと。そんあうまあ

河魚初上

十五

つらさうら。ごふぞ 幾つと せられであいヨ。影すも  
 隙よとらづらーんガ。つらむる 土の道哲で。と如  
 由一所よ居て。ふつけこ 地方の良からち。何処  
 床一の 奇麗な 妙方と。あつことたよ 携えがた  
 とまるほど 恋風の。身よあまぐと 滯りたり。そを  
 より 後ハ ぐらくと。ゆるふつけく 氣のちこらく 物  
 夕目きたよ ちらくと。ごふぞして 暮一。月。ころん  
 のごごめふの。ほりくして かの 商ひよ。ふいふの。

ま一回お 良くは 名もあまび。そを 羨つと  
 中こらづらひ 親兄弟 小苦勞と かける。よくく 不  
 考る此身と。あひるー せめても 明らかれ  
 ぬ何の 因果う。それよゆの 怖の 夢と。ちりくと  
 足てうるな されて 目が 覚てう 汗むら ちやう まで  
 今日ハ 別しての こと 氣のちが 日るく して 死すう  
 余ハ ちやう せまも ず。氣のよる こと を おひい  
 むらつぞや 道哲の。高維の 塚を ありよ ちらと。

乃 ち方かたへ何なに処ところぞ申まをす。あまほけきとぞはもる  
まらどおひるさるりの。あまほけきとぞはもる  
まへとあいのたまふに怖おそいゆめとあまほけきとぞはもる  
あまほけきとぞはもる。あまほけきとぞはもる  
あまほけきとぞはもる。あまほけきとぞはもる  
あまほけきとぞはもる。あまほけきとぞはもる  
あまほけきとぞはもる。あまほけきとぞはもる  
あまほけきとぞはもる。あまほけきとぞはもる

のつひをいそふと心こころのせのくゆちがううく。  
とてあつち。あまほけきとぞはもる  
あまほけきとぞはもる。あまほけきとぞはもる  
あまほけきとぞはもる。あまほけきとぞはもる  
あまほけきとぞはもる。あまほけきとぞはもる  
あまほけきとぞはもる。あまほけきとぞはもる  
あまほけきとぞはもる。あまほけきとぞはもる  
あまほけきとぞはもる。あまほけきとぞはもる

兄 魚 刀 二



されど高維うあらん。存の高イれどあつと。故  
くよん標致と。女あぐももつと。其終なき。  
當下女ハ完ホエして。モ聖人あらん。其  
吾儕がやうして出ん。さぞ怖イもあひ  
あせせうか。何ふもころるのみあつせん。且了ん昔  
郭里のつとあ。人よあれ。高維えす。罪せう  
あつ。深まれむ。今もて宙宇よりあつと。呻吟  
居ん。まのこころが勤めのもあ。仕つて  
先

みどりが再生を自ぬ。終あつあま人の體をかりて  
あぐく世人の心の終ぐ。因果をうと。其のど  
終も業あつ。とよあま人も過世の罪。とつと  
あま。辛苦患苦も救ま。其の  
とあふとえも。さびく。あつて。あつて。あつて。  
と全。憂苦勞と。仕課せ。あつて。あつて。  
うの。罪障の雲。あつた。あつて。真如の月。あつて。  
あつて。實相无漏の法。あつた。道の。あつて。あつて。

みる。いづれかこゝろのさきぎら。まぶしくいふ。その  
 耳も響かぬと目が覚る。りこの夢が心夢ある。  
 此身いづれあることとや中。そまをいふ。たゞのうらも。  
 死んぞまきとあひまたト嘆くおらあふまきしと。  
 志をいぐ間うちまひまへるんのも。次由多のまが  
 ありたると病氣のせぬ。あひねの夢とや。よふも  
 いもたせむあふむと夢がほんまふ。當りあふ。暮ら  
 とやるとまらる人ふ。活くやうとむお合ふよあの手ん

まくそんる思慮をいふ。卒と世とも卑くよふある  
 かうに。氣とまづらりとあひちるまふ。つひの心  
 月の同胞が心のうちこそ。絶けけ

錦の魚初編卷之上終

